

## 札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会 <第1回 地域・コミュニティ部会>

日時 平成24年3月14日(水)13:30~16:30  
会場 札幌すみれホテル 3階「ヴィオレ」

### 1 開会

---

#### 【可児部長】

趣旨説明・開会案内

### 2 議事

---

#### (1) 重点戦略のテーマ設定について

#### 【浅村課長】

資料説明(資料1、別添1、別添2)

#### 【杉岡部会長】

- ・部門別計画には膨大な労力がかかっている。
- ・セクションごとに組み立てられている。
- ・シームレスに検討し、部門別計画に接合するプランとなるか整理する必要がある。
- ・重点テーマの設定についてお気づきの点を指摘願う。

#### 【五十嵐委員】

- ・ビジョンの柱が出てきたら増やしてよいのか、それとも2本の柱に整理するのか。

#### 【杉岡部会長】

- ・クロスオーバーした議論を進める。
- ・新しいテーマが出てきたら、事務局にてうまく整理・まとめなおしてもらおう。

#### 【五十嵐委員】

- ・資料1<ねらい>の3番目にある、「地域だけでは支えられない課題を解決するための社会システムを構築する」とあるが、ここだけ読んでしまうと「地域」と「社会システム」が別々なものにみえる。
- ・「社会システム」に「地域」を組み込むイメージなのでは。
- ・「次世代育成」について、「豊かな創造力・特色ある教育」はどのようなイメージか。

#### 【杉岡部会長】

- ・話が大きく、国家レベルのもののように思う。
- ・札幌で先行する取り組み+αがどういう考えのものか。

#### 【浅村課長】

- ・「地域」と「社会システム」は別々のものではないと我々も理解している。
- ・表現に留意し、「地域と社会システム」を融合・同じものとしていく。
- ・「教育」について、札幌市ではこれまでも「環境・読書」など、札幌らしい人づくりに向けて「特色ある教育」に取り組んでいる。
- ・札幌の将来を担う人材づくりの上で、「特色ある教育」「想像力」を育む教育」どのようなものか、ご意見を期待している。

#### 【杉岡部会長】

- ・今ある施策をどこを抜本的に見直さなくてはならないのか。
- ・担当セクションと設定がかみあわなければスローガンだけになってしまう。
- ・中核をしっかりとしたものとし、現場に落ちていくようにしなくてはならない。
- ・掘り下げる、増やしていくなど、議論は多岐に渡るので難しい議論になる。

#### (2) テーマにおける想定取組について

#### 【杉岡部会長】

- ・事前をお願いしていた各委員からの提案・提言について、本日は札幌市の関連部局の関係者が集まっているので、現場につながるようなコメントを含めて提案をお願いしたい。
- ・資料には便宜的に番号をふっており、順番に進めていきたい。

#### 【浅香委員】(資料 2-1 参照)

- ・目標は、安心して暮らせるまちづくり。
- ・課題の一つ目はニーズの多様化に対応できるか。
- ・以下は例になるが、除雪・ゴミステーション・交通・医療・在宅介護など。
- ・市民ニーズ、高齢化が進むと障がい者も含めて行政がどこまで対応できるか、ますます難しい時代だ。
- ・課題の二つ目は成果主義に偏っていないか。
- ・例として町内会の件、社会的弱者の疎外など。
- ・身近な点では、町内会の清掃を例にすると、高齢世帯・障がい者世帯では、体力的に手伝いたい但し手伝わないでいる。そうした方々への対応は？
- ・活動できる人のもつ、「できない状況にいる人」への意識はどうなのか考え続けている。
- ・清掃を手伝った人は、終了後ジュースなどをもらって帰っていくが、手伝わない人にはどうしてあげたらいいのかといつも思う。
- ・例えば、手伝った人は手伝わない人にジュースをもっていき、立ち話ついでに安否確認も兼ねて、一言声をかけてあげることで、公園清掃を手伝えた意識付けになると思う。
- ・「やってくれない・ほしい」ではなく、自分も「自助をしよう」と言い続けている。
- ・公助に頼りすぎない暮らしづくりが少しずつできあがってくると思う。
- ・「知らない」から「知らせる」、「気づかない」から「気づかせる」。
- ・例えば地下歩行空間には、展示ブロックが2本ひいてある。

- ・地下鉄でも展示ブロック上での立ち話・携帯電話の使用などがよく見られるが、地下歩行空間ではアナウンスをかけてもらっている。
- ・展示ブロックとしての意識付けがあれば理解できるが、「イボイボ」としか理解していない人はいる。
- ・地下鉄の携帯マナーゾーンも意識していない、わからない。わかってもらうようにする意識付けが大切だと思う。
- ・孤独死や孤立死の問題があるが、小さなコミュニティの連携により一つのコミュニティが何らかの手段によって「安心な暮らしづくり」のモデルとなり、隣近所の町内会がそれにならっていくような形をとると、地域・町内会同士の競争意識も芽生え、そうした動きが促進されるのではないか。
- ・厚生労働白書 2006 の数字では、「近所付き合いが希薄になる」が85%。
- ・一方で「近所付き合いが盛んになる・なってほしい」を合わせると84%。
- ・もっと近所づきあいが盛んになってほしいと思っている人は多いことがわかる。
- ・平成23年度厚労白書でも「近所付き合いが盛んになってほしい」は80数%であった。
- ・国民意識、日本の文化と言え、札幌も同様の数字になるのではと思う。
- ・10年という事ではないが、タイムリーな事業の実施。
- ・自分の祖父母が亡くなっても白骨化したまま放置した人、行方不明のまま百数十才の方がいた。
- ・札幌だけではなく、釧路の孤立死も話題になった。
- ・それから昨年の東日本大震災。
- ・「防災」を一つのテーマにすると、「住民のつながり・地域リーダーの発掘育成、災害弱者の居場所づくり」など社会資源の発掘が可能ではないか。一番重要だと考える。
- ・札幌でも災害時要援護者活動が進められているが、現状は町内会の5%の実施である。
- ・活動が活発な地域では、「就労していない看護師・保育士、元気な高齢者」など、いつでも有事の際に助けますという方が現れている。
- ・企業でもトラックや重機を貸す、小さいものではスコップやハシゴを、そういう会社も現れている。こういう市民組織ができあがりつつある。
- ・組織というと大げさだが、挨拶「おはよう・おばんです」からのコミュニティづくりが基本。結論は出ないが、意見と提言である。

#### 【杉岡部会長】

- ・議論は後ほどまとめて行いたい、確認しておきたいことがあればどうぞ。
- ・特段なければ、五十嵐委員。

#### 【五十嵐委員】(資料 2-2 参照)

- ・地域共生という考え方について。
- ・「地域共生事業の考えた方～地域の生活(福祉)と経済(社会的企業)と就労(雇用)の一体的な推進～」
- ・経済・就労がバラバラの施策となっているが、一体化が必要
- ・「ソーシャルビジネス」、「コミュニティビジネス」、「社会的企業」、「新しい公共」いろいろ呼び名はあるが、考え方が確立していない。今生まれてきた概念といえる。
- ・これまで私は介護系の仕事に多く関わってきたが、その中で、高齢者・障がい者と対象を限定しない介護について検討してきた。
- ・北海道においても対象者を限定しない、制度やサービスによらなくても対応し、地域づくりと就労の場につながる

共生事業が展開されている。

- ・最も有名なのは「釧路生活支援ネットワーク」の「まじくる」や「冬月荘」といった取り組み。
- ・釧路市は生活保護世帯の割合が高い。
- ・生活保護世帯、その子どもの教育、市の福祉と一緒に地域 NPO の方々が様々な事業を作り出した。
- ・農村で過疎化が進んだ地域として、当別町で障がい者・農業・団塊の世代を中心とした事業が展開されている。
- ・登別市は、ベッタウンでの事例として、助け合いをチケット制で実施。
- ・ホームヘルパーに関わる人が社会起業家集団をつくった事例である。
- ・福祉サービスを提供する側と受ける側を分けない。受ける側も役割・意味を見出し、取り組んでいく「共生事業」が様々な地域で展開されている。それには共通する理念がある。

- ・一つ目は、住民・地域ニーズからスタートしていること。
- ・困ったところに地域課題はある。制度によらない動き。
- ・浅香氏の意見にもあったが、地域資源について「地域にあるものは全て資源」と考えている。
- ・自分が必要だと思われることは「地域資源」の一つである。
- ・ビジネスとして成立するかについては異論があるがスタートはそこ。
- ・二つ目は相互関係性。
- ・サービスを受ける側・する側、相互関係を生み出すことで事業展開が生まれる。
- ・三つ目は入口から出口までの一貫した対応。
- ・困っている人がいて、相談事業や窓口対応、何とかセンターはたくさんあるが、出口をつくる必要がある。
- ・入口がたくさんあることに意味があるわけではない。
- ・他の業界と協働で動く事により出口がつくれる。
- ・ニーズ、課題発見→専門家をつなぐ→だめなら戻って考え直す。
- ・四つ目は地域資源。
- ・地域にいる人、あるもの、あること全てが資源である。
- ・五つ目は就労と活動の場をつくり出すこと。
- ・すべての人が社会的な価値がある「意味」を見出す事。
- ・居場所、活動の場、自分の役割、出番をつくり出す場である。
- ・六つ目は事業の継続性。
- ・運営の組織体の形成が必要。地域の住民から専門家までの組織化が必要。

- ・これらを踏まえ、札幌市では何ができるかを考えている。
- ・地域ニーズから出発。地域の課題は何か、課題者は何を望んでいるか
- ・どうなったらいいのか、そしてどうするのがよいか。事業化のプロセスを常に念頭におく。
- ・出来上がりの姿が見えても、そこまでに至るプロセスが不明確だと参加意識が薄れる。
- ・札幌市は広いので、地域からのモデル事業の企画提案を受け付ける。
- ・プロセスのガイドラインが必要。
- ・住民組織だけ、専門家だけではできないことがたくさんある。例えば両組織が共生で事業を始めてみる。
- ・札幌市で行っている「高齢者サロン」には若者・子どもは来ない。誰もが来るサロンを地域で運営してもよいのではないか。

- ・住まいの問題もある。高齢者単身世代の増加、空き家の増加活用、それらの活用を含めて共生事業ができないか。
- ・家族の支援、例えば要介護の両親と障がい者の子をもつ家庭では、ケアがちぐはぐになるため、家族支援が難しい。モデル事業として支援をしたい。
- ・あくまでその地域に何が必要なのかをモデルにする。
- ・活用できる事業の洗い出し。事業費の課題、資金をどのようにするのか。
- ・福祉、商店街活性化、まちづくりなど何でも使えるような資金の提供。
- ・福祉だけに限定しない、就労、地域活性化、経済活性化を含めたものの提案。

#### 【杉岡部会長】

- ・いろいろと「取り組みたい」人はいる。
- ・ニーズをきちんと把握しているか。ニーズに関わらず、ただ「やってみたい」人もいる。
- ・ニーズと取り組みたい気持ちを結び付ける仕組みも必要かと思う。

#### 【五十嵐委員】

- ・無理に合わせるとうまくいかないものもあると思う。

#### 【梶井委員】(資料黄色い紙参照)

- ・札幌市には様々な部署ごとの取り組みがあるが、横断的・串刺しにできる取り組みは何かを考え、提案する。
- ・地域の共生型サロンと総合的な情報ステーションの設置が必要。
- ・今、五十嵐委員からもあったが、サロンの事業化促進は、社会的包摂や社会参加を実践的に続けてきた市民の取り組みが積み上がってきている。しかし、周知されていない。
- ・「総合情報センター」で取り組みやノウハウを集積し、必要な所を巻き込んで発展させていく。
- ・2年前、札幌市若者総合支援センターをつくった。包括的活動に発展している。
- ・子どもアシストセンター、各小中学校、高校が連携し、機能的・有機的成果につながっている。
- ・地域の共生型サロンをセンター化し、発展的に機能させていきたい。
- ・子育てについて「不安・負担」を5割の市民が感じている。
- ・解決策を含めて就学前の子育て支援を徹底すべき。
- ・就学前の子育て支援が障がいの有無で別れているが、就学前は一体化して進めていくほうがよい。
- ・四国の善通寺市ではかなりの成果をあげている。
- ・地域で障がいのある子を認識していくことは効果がある。
- ・基礎学力の保証が必要。学力危機が若者支援にも連動している。
- ・就業保障・支援にもつながる。
- ・小学校4年生クラスの基礎学力をもっていないと、就労に問題が出る。
- ・基礎学力の保障、学習支援制度の充実が必要。
- ・高校生で基礎学力をもたない生徒がでてきている。
- ・社会教育については十分な予算がないと感じており、弱体化しているので強化が必要。

- ・ひいては子どもの権利、若者支援につなげる札幌モデルになると考える。
- ・人材育成について、前回の審議会で杉岡氏よりボランティアとビジネスの間の連続性を考えるべきという意見があった。
- ・社会的企業の支援促進とコンサルティング提供、市の専門部局設置やユースビジネスコーディネーター、ユースコミュニティワーカーなど、若者・子ども支援の具体化を提案とする。

#### 【杉岡部会長】

- ・社会教育の予算が十分でない、との発言があったがどういう事か。

#### 【梶井委員】

- ・札幌市社会教育委員をやっていたときの印象論である。
- ・社会教育を機能的に充実することで、ひいては学習支援・子どもの権利に関する仕事が生まれると考えている。
- ・具体的な数字・データはないが、今よりもっと強化していくことが望ましいという意見である。

#### 【高木委員】(資料 2-4参照)

- ・「戦略ビジョン」というからには、未来に対してわくわくするような言葉が必要。
- ・施策に移す時にイメージが膨らむもの。
- ・現状は「これまでにでてきた言葉だな」という印象。
- ・「地域」とは何かをとらえ直す。
- ・様々な課題を地域の中で解決する事ができるかには、疑問がある。
- ・地域概念をより広くとらえる必要がある。
- ・現状のベースは地縁的地域。より広い地域イメージも必要ではないか。
- ・「居場所」や「出番のある場」など、複数あるのが「地域」だと思う。
- ・「地域」というものを「自分の住んでいる地域」的概念から切り離す。
- ・逆にいえば「自分たちの住んでいるところだけで解決しなくていい」というビジョン化が必要。
- ・ひいては「コミュニティ」とは何かにつながる。
- ・すでにSNSなど、60代世代と若者とは異なる新たなコミュニティができています。
- ・さらに 10 年後となれば、つながりが大きく異なると思う。
- ・以前に比べ、ボランティアのやりとりも早く進んでいる。
- ・そうしたコミュニティの中に「居場所」も見つけている。
- ・それを自分の地域に持ち帰り、学生たちとコミュニティ活動を広げる事例が出てきている。
- ・コミュニティは地域住民だけではないというイメージを広げられたら。
- ・その中に地域資源である「顔の見える人材」が誰なのか。
- ・そうした動きがこの5～6年、学生やコミュニティカフェ等で相当に動いている。
- ・桑園の「マイカップ」というコミュニティカフェが市の支援を受け、防災マップ、お祭りなど商店街を巻き込んで動いており、学生の団体も複数立ち上がっている。
- ・担い手になる第一群は現れている。第二群をどうしていくかが問題。
- ・第一群がスターになり、人づくり、地域づくり、地域担い手づくりを養成していく。

- ・そうしないと次世代、次の担い手は現れない。
- ・顔の見える関係性、次の世代をどうつくるかを視点とすべき。
- ・コミュニティを大きな視点で見ることについて。
- ・札幌は北海道の中の札幌、大都市という意識が外せない。
- ・田舎では、例えば3千人の街では1年で離農者が4名出る。コミュニティの崩壊・疲弊が進んでいる。
- ・食糧、人材、エネルギーを都市が吸収している。
- ・都市が地域を支える仕組みを札幌市が先駆者として作りあげられたらよい。
- ・札幌が元気になれば地域も元気が出る仕組みをつくる。
- ・東京の社協で、被災地にボランティアを2～3週間の期間ごとに送り込む仕組みができています。
- ・そうする事で、地方の担い手を作る。さらに東京で何かあったときには、逆に地方から来る関係性を作るとはつきり言っていた。
- ・危機感を持っている地域は動きが早い。
- ・北海道も一緒。第一次産業がダメになれば失業者が増え、人口流出や高齢化・就労できない課題がどんどん進む。
- ・危機感を持ち、北海道の中に札幌市の役割を入れたい。
- ・人材が流出し、収容が出来ないという現状に危機感を持ち対応すべき。
- ・社会的インターンシップが必要。
- ・若者の「実地で実労働しながら様々な現場で生きている人に出会いたい」という関心は非常に強い。
- ・「グローバル化する社会経済環境の中で活躍する人材の育成」
- ・まことに美しい言葉だが、人材がそんなに育たないと思う。幻想ではないか。
- ・7割いる一般の若者への希望を与えることが必要。
- ・都市像にもよるが、個々の個性の活かし方・暮らし方、多様な人が出会い、学びあい、新しい仕事の生まれる場を若者たちに与え、それに伴う具体的な政策が考えられると思う。

#### 【服部委員】

- ・資料を用意できなかったので口頭にて提案したい。
- ・今日の道新の記事に「民生委員」の減少、なり手がいないという記事があった。
- ・自分のまわりで考えた。民生委員の方を目にしたことがない。
- ・民生委員は何をする人なのか？自分の生活の中に実体感がない。
- ・来年度、中央区の社会福祉協議会の評議員になる。評議員の中では若い世代のほうである。しかし、社協がどんな取り組みをやっているのか知らない。そういう機会がないとわからない。
- ・日々仕事をしていると、家を出て仕事をして・実体験として、地域に感情をもつ、参加するまでにつながらない。
- ・自分はコーポラティブハウスに居住している。
- ・6世帯で土地探しから住まい方の検討など1年間をかけて行ってきた。
- ・5年前に住み始めた時、2世帯に子どもがいた。
- ・現在は全世帯に子どもがいる。親子ともにコミュニティが広がっている。
- ・町内会からも若い世代の住む建物だと認識され、声をかけられるようになった。町内会の班長をお願いしたい、新年会に来ませんか、など。

- ・お声がけをきっかけに、旧来からのコミュニティに新人が入り、コミュニケーションができた。
- ・地域の活動に参加し、実体を聞くと10年後5年後に誰がこの地域を担っていくのか？自分の事として実感させられることが多い。
- ・顔見知りができる地域に愛着がわく。知らないときには、自身の認知度が深まらない。

・札幌オオドオリ大学の取り組みについて

- ・任意団体であり、取り組みから2年目。
- ・学長は20代後半の女性で、その他に10名のコーディネーターがいる。
- ・毎月第二土曜日に授業を行っている。
- ・校舎はなく、様々なテーマをいろいろな場で行っている。
- ・学生は20～30代が約半数を占め、学生登録は1,500名。
- ・こうした取り組みは各地であるが女性が多いそうで、実際札幌でも7割弱が女性である。
- ・大学についての自身の所感として「第三の居場所」を提供しているのだと思う。
- ・自分が好きなものに参加する。参加した人同士はコミュニケーションが深まる。新たな仲間ができる。しがらみもない。参加者は主体的になる。
- ・コーポラティブハウスと札幌オオドオリ大学との共通点は、「自分が主体的に参加する、取り組む」ことにある。
- ・町内会は既存システムの中、地域に住んでいる人の参加に限定される。
- ・地域に住んでいない人が参加する仕組みはあるのだろうか。
- ・住んでいなくても、桑園が好きだから、桑園の活動に参加するということがあってもいいのでは。
- ・地に足をつけて、そのまちに参加するほうがいいよね、と若者が言う。教えられた。
- ・自分が主体になって参加しなければ、責任をもって取り組みを進められない。
- ・町内会の既存システムを変える、新しくする、違う組織にするのか考えなければならない。
- ・自分が関わってきたものとして桑園連町の「ミニ大通公園まつり」は非常に面白い。
- ・住んでいる人、働いている人が一体でコミュニケーションをつくりながら実施している。

・市内にはまちセンが87カ所ある。

- ・中央区内のまちセンと2年間かけて「まちのモト」を発行している。
- ・そこで「地域にどんな人がいますか」と問いかけると、町内会長・交通〇〇会長・・・会長ばかりでくる。
- ・「まちのモト」の原稿についても、町内会におうかがいをたてる。いい取り組みなのだが地域と意向が違くと文章が変わってしまう。誰の何のためなのだろうか。
- ・まちセンはうまく地域のプラットフォームとしての機能を発揮してほしい。

・子育てについては、まち会社の取り組みとして検討中。

- ・国の施策としての総合こども園。
- ・中心街だからこそ必要な、ならではの託児・保育があると思う。勉強していきたい。

【福士委員】(資料 2-6 参照)

- ・基本的に「地域コミュニティ」「人がまちをつくり、まちが人を育てる」というトータルなまちづくりができれば素晴らしいと思ってやってきている。



- ・現場の話に偏ると思うが聞いてほしい。
  - ・各地区で人が違う、思いが違う。
  - ・思いが一点に集中しないと動かない。
  - ・私たちは、住民同士で手をつなぐ。
- 
- ・きっかけは、10年前に行った「地域ワークショップ」。
  - ・子どもから大人までが参加し、何を求めていくのかを話し合った。それが始まり。
  - ・私たちの地域は開基130数年ということでこれまでの積み重ねがある。
  - ・いまだに「あいさつ運動」など、これは学校の先生が提唱した事がきっかけなのだが、現在も続いている。
  - ・高齢者の多い地域でもある。町内で「買い物ができる場所」に取り組み、「朝市」をはじめて9年ほど続いている。
  - ・「朝市」には、コミュニティサロンとしての機能があると思っているが、より発展した形に派生し、「コミュニティサロン・駅」をつくった。
  - ・札幌市内に唯一残る定山溪鉄道の旧駅である軟石倉庫を活用して実施している。
  - ・また、小学校の連携による「グリーンストーン」がある。
  - ・子どもたちが主体となった地域活動を行う。もちろん大人もサポートしているが、あくまで主役は子どもたちである。
  - ・地域のいいところをのばしていくことがまちづくりの重要課題。
  - ・行政については、我々は大学との協定・提携がうまくいっている市立大や東海大。
  - ・とくに東海大学の西岡学長は自身「行動する学者」といっているが、地域住民とラベンダーづくりを行ったり、地元  
の食材を学食で提供してくれている。私たちのできないことをやってくれる。
  - ・地域と行政の連携が必要な場面はまだまだ沢山ある。
  - ・地域のことは地域の人が一番知っている。自治の促進が必要。
  - ・地域の人が自分たちで決めていこうという意識付け、その気があればできる。
  - ・我々の地域のまちセン自主運営は4年目となった。
  - ・南区では5カ所が自主運営されており、近々もう1カ所が自主運営となる。
  - ・自主運営のメリットは、たくさんある地域課題を優先事項からひとつずつ、すばやくクリアーできること。資金を有効活用できることである。
  - ・札幌市の担当部局においてもまちセン自主運営の促進をテーマとしている。
  - ・自分たちのことは自分でできる。それこそがコミュニティづくり。
  - ・リーダーの問題はあるが、地域の中にリーダーとなる人材は必ずいる。
  - ・リーダーが行政とのコーディネーターになる。必ずできる。
  - ・地域の防犯は地域で。
  - ・87カ所あるまちセンのうち、エリア内に複数の連町が入るところは分割して、やる気のある地域はどんどん自治を進めていく方がよいと考える。
  - ・地域の広域的な考え方としては、南区シーニックバイウェイ。今までの活動を広域に連携しようというもの。
  - ・この取り組みで真駒内・定山溪はこれから大きく変わっていく。
  - ・希望・意志をもっていれば、様々なことができる。

#### 【杉岡部会長】

- ・「人がまちをつくり、まちが人を育てる」。哲学があり、実践がある。

- ・開基 130 年という地区的なものも大きいのかと考える。

#### 【星野委員】

- ・抽象的なつっこみとして、一番最初にもらった重点戦略にコメントする。
- ・安全安心、主にコミュニティについて。コミュニティを外からつくることには疑問。
- ・地縁・地域社会は実際には「高齢者・主婦・子ども」でつくられているだけ。
- ・有職者は日中地域外にいる。
- ・かといって退職後に地域活動に関わるのは難しい。上下関係のある職場等の関係性から地域社会のフラットな関係性になじめないと聞く。
- ・地縁だけでなく、趣味・自分が好きだから関わるコミュニティは多い。
- ・もっとよくしようという思いで関わることができる。
- ・若い世代は「簡単」、「インターネット」、コミュニティ意識が違う。
- ・町内会・地域でない新しいコミュニティを考えなければ次世代がうまれない。
- ・高齢者は保護対象だけでなく、元気な高齢者は多い。活躍の場の提供が必要。
- ・札幌は大学が多いので、巻き込む。いいものが生まれるのでは。
- ・年金の問題、世代間のイヤな体質が出来ている。身近に高齢者と若者が両方いる状況をつくる。
- ・新しいコミュニティのあり方を考えていくことが必要。
- ・高齢者と若者のつながりづくり。世代間の分断の解消。
- ・「これまでとちがっていい」ということを伝える。行政の役割はその機会づくり。
- ・コミュニティづくりは強制できない。行政がどこまでできるかが課題だ。
  
- ・次世代について、仕事を探す＝会社に入るという感覚が大半。
- ・仕事がないなら、つくればいい。そうした気質があるかといえば無い。
- ・体感ではあるが、東京には、どんどん新しい仕事をやればいいという考えが根付いていると思う。
- ・制度的に支援の仕組みがあっても伝わっていない。
- ・先行するモデルがないので、理想をもって新しいことを起こしにくい。
- ・例えば、福祉に関わる人は知っていても、起業したい人には情報や仕組みが伝わらない。起業の情報として共有できないか。
- ・「仕事づくりのやりやすいまち札幌」が定着すると、他のまちから人材が集まるのではないか。
- ・北海道はこれまでの歴史上からもよそ者がなじみやすいといわれる。よい所を活用すべき。
- ・現状の教育について、ポジティブな話が多いが、マイナス面をどう解消するかを最初に取り組まねばならない。
- ・プラス面ばかりを取り組んでいくと取りこぼしが出る。
- ・教育については国レベルの話も多い。
- ・札幌市のできる範囲で工夫できるとよい。
- ・札幌らしい特色のある教育「札幌らしさ」自体は目的ではないという点に注意すべき。
- ・教育で目指す事、根本的な事に合わせて国レベルでは足りないことを札幌市で工夫、付け加えられるといい。

#### 【杉岡部会長】

- ・地域コミュニティについては、地縁だけではないものがたくさん含まれる。

- ・「地域」をどうとらえ動くのか。
- ・継続的に取り組む中で事業を組み合わせながら、自主運営に結びつける。
- ・札幌市全体に元気が出るもの。
- ・「人がまちをつくる」「主人公としての私たち」をどうつくっていけばいいのか。
- ・たくさん動きがでてきているが、地域とどう関わればいいのか。
- ・新しい取り組みをすることで、地域とつながりができる。
- ・新しい担い手づくり、仲間をどうやってつくるのか、地域に限定しない仲間も含まれると思う。
- ・担い手や「場」をどのように設定すべきか、場としては「サロン・カフェ・居場所づくり」などがある。
- ・空き家、空き店舗の活用事例。それらをどのように活かすのか。
- ・次世代、雇用については、担い手と場の仕組み。
- ・立体的解決を図るための共生型事業という仕組みを進める。
- ・社会的インターシップという考え方で仕組みを動かしていく。
- ・若者達がつながるといふ事の必要性。
- ・世代間の交流をつくれぬか。
- ・各町内会では工夫を重ねている。
- ・福士委員の試行錯誤の積み重ね。
- ・まちセンのプラットホーム化。
- ・仕組みをどう考えていけばいいのか。
- ・一度休憩をはさみたい。

～休憩～

#### 【杉岡部会長】

- ・事務局から、今までの話の整理をお願いしたい。

#### 【ノーザンクロス：山重】

<地域コミュニティのこれからの捉え方>

- ・地縁中心が現状であるが、テーマ型というような新しいコミュニティが出てきている。
- ・つながる場所、居場所としてこれからどのようにあるべきか。

<地域の自治活動・住民活動の実践者>

- ・顔の見える隣人関係、住民同士で地域課題を解決する。
- ・前向きな実践活動が重要。
- ・住民だけでは解決できない課題、自治活動を外からサポートする。
- ・より広い地域の視点から解決するなど。

<具体的な提案>

- ・共生型事業・起業。
- ・さまざまな施策を横断的に取り組む、新たなアプローチを見出す。

- ・事業を担っていく活動の場、就労の場。
- ・人材育成のための社会的インターンシップ、起業、雇用、サポート。

#### 【杉岡部会長】

- ・論点整理の中で、さらにポイントを整理する必要がある。
- ・専門委員よりコメントを願う。

#### 【木下専門委員】

- ・地域の階層性、特性をどうとらえるか。
- ・地域が一般的にとらえられている。
- ・地域の活動が活発・不活発の違い。
- ・活発な地域は、概して戸建てが多く、退職者の活躍が目立つ場合が多い。
- ・活動が活性化しない地域は、小さな集合住宅が多く、低所得、若い世帯、勤労者が多い。
- ・地域を分類して考えていく必要がある。地域イメージ。
- ・住民の行動範囲、例えば「子どもやお年寄り」は小学校区・町内会エリア、「有職者」の場合、市や道レベルでの行動範囲の「地域」となる。
- ・高校・大学生であれば、町内会を越えた「地域」となる。
- ・地域の属性、対象、人材によって変わる。
- ・今年1月の、白石区で発生した孤立死の問題。
- ・行政と民間の協働の進め方、あり方が問われている。
- ・現場の白石周辺は比較的低所得者が多いのでは。
- ・そうなると地域活動も組織化しにくい、住民だけでは困難。
- ・行政支援、障がい者福祉相談からのアプローチが重要。
- ・一般的な部分、ニーズの高い部分の役割分担・協働のあり方のイメージが必要。
- ・「地域コミュニティ促進」と「社会的包容力の強化」が区別しにくい。
- ・もっと明確にするならば、表現を「地域コミュニティの促進」を「一般的な組織化の部分」、障がい者等に特化しない地域活動、一般のまちづくりに焦点をあてる。
- ・「社会的包容力」については、「ニーズの高い部分」に焦点をあて、協働・支援ニーズの高い事業を落とし込むとより明確になると思う。
- ・プラスの部分を発展させる、マイナスの部分を克服することを考える。

#### 【中島専門委員】

- ・皆さんの議論を整理させていただくと、共通合意として「「コミュニティの構造変動」であった。
- ・政治学者であるロバートパットナムのコミュニティ論から、コミュニティを考えるにはボンディング(絆関係)とブリッジング(橋渡し)という二つの類型をまず考えるべき。
- ・ボンディングとは非常に強い関係。かつての日本は日本型再配分の構造が背景にあり、それが町内会や村落部におけるボンディングのコミュニティを生んできた。
- ・今問われているのはボンディングという関係性を重視しつつ、ブリッジングの関係性をつくるべきという議論。
- ・現代社会にどうやって古い組織を生かしていくか。

- ・商店街問題のように、無くすのではなくどう新しい形に変えていくのか。
- ・高木委員からは、居場所というのは「地域」の空間に限定されるのではなく複数存在するという話。
- ・服部委員からは、第三の居場所、地縁とは離れた場所ではがらみのない関係が生まれ、主体性が活性化されるという話。
- ・星野委員からは、「趣味の縁」のようにこれまでの地縁とは違うネットワークの形成。例えば定年退職したおじさんの地域再デビュー問題などの話があった。
- ・社会学では「斜めの関係」が問われている。
- ・これまでの学校や職場といったタテ・ヨコの関係は、人生相談をしにくい利害関係が伴う相手。利害関係がない「斜め」の関係が重要になってくる。
- ・また、ウィーク・タイという弱い紐帯(ちゅうたい)の重要性が議論されている。
- ・強い関係性の中では居場所があるように見えて孤立しまう。居場所の質の問題がある。
- ・「斜めの関係」は木下委員と五十嵐委員の提案にあった、セーフティネットに関わってくる。
- ・私の取り組んできた活動の中では、「ビッグイシュー」が近い。
- ・「ビッグイシュー」はホームレスと一般の人の間に「斜めの関係」をつくることができた。
- ・雑誌に掲載している「ホームレス人生相談」。
- ・20～30代の女性がホームレスに相談する。職場の上司には絶対言わないことを話す。
- ・今まで繋がりようのなかった人達の関係性が生まれ、新たな役割づくりが生まれる。
- ・五十嵐委員からご紹介のあった「冬月荘」。
- ・生活保護の中に斜めの関係性を入れつつ、中間的就労の問題、居場所の問題、新しい仕事への意欲、やりがい全てが含まれる。
- ・居場所とセーフティネットの問題。
- ・問題は外との繋がりを失う「たこつぼ型」にある。横のつながり、プラットホームが重要。
- ・木下委員から話があった民間と行政の問題。諸団体をつなぐプラットホーム化が重要。
- ・ある人の困難な状況は「自殺防止なのか、生活支援なのか、就労支援なのか」、横のつながりではじめて解決できる状況。
- ・居場所の問題、市民協働という問題、大きな視点としては重要になってくる。
- ・浅香委員から話があった「やってくれない」から「やらなければならない」への変化。
- ・市内のNPO活動は盛んといわれるが、人口の1割程度である。
- ・9割の無関心層をどう引き込むか。私は「社会的参加の動機付け問題」と呼んでいる。
- ・日本は「お祭り」のように一瞬で始まり一瞬で終わってしまう。寄付が続かない持続可能性の課題は日本の大きな課題である。
- ・行政はどのような関わり方をするのか。そこにまちセンの役割、意味づけ、位置付けを考えていくヒントがあると思う。

#### 【杉岡部会長】

- ・次世代の人を育てる問題にどう接していくべきか。

#### 【中島専門委員】

- ・私は最近商店街の課題に取り組んでいる。発寒商店街のカフェハチャムが代表例。

- ・こうした課題は若い人の食いつきがいい。
- ・私自身の専門はインドなのだが、最近の若者はインドの貧困問題の解消などへの興味は低く、逆に地域のまちづくりへの関心が高い。
- ・宮藤官九郎のドラマは人気があるが、大半のタイトルに地名がつく。何ということもないまちの、何てことない人が、何てないことをする。「新しい地域主義」が生まれている。
- ・「社会の役に立ちたい」「ソーシャルビジネスをやりたい」という若者が増えていて、驚く。
- ・彼らの動きを支え、どう広げていくか。
- ・動機付けが獲得されている人たち、どうキャナライズしていくか。

#### 【杉岡部会長】

- ・わかりやすく整理いただいた。
- ・これからは自由な意見交換をと思っている。

#### 【梶井委員】

- ・木下委員からの意見にあった地域特性を把握した上での検討をビジョンにどう盛り込むか。
- ・「斜めの関係」をどう地域にどう落とし込むか、構想していけるのか。
- ・具体的に「斜めの関係」をどうデザイン・構成してくのがポイントかと思う。

#### 【高木委員】

- ・この数年で若者が登場し、アプローチが増えた。
- ・大学生からの講演依頼などが来ており、若者が30代ぐらいを見つめている。
- ・被災地の現場に大学生が行き、高校生をどう巻き込むかについて、複数の団体がトライしている。
- ・大学生はスカイプを用いて釜石と札幌の間で会議を進めている。
- ・ビジョンは次世代が活躍する舞台をつくるためのもの。
- ・舞台監督・脚本は次世代の役割、私たちは役者を用意する、プロデュースをする。
- ・若い人とのつながり、役割分担で企画がどんどん進んでいくことを実感する。
- ・それを後押しする施策。
- ・社会に関する不安感がある。「何か私がしなければ」という機運につながっている。それに期待している。
- ・大道具や舞台装置をどうしてあげるか、をビジョンに反映していく。
- ・「斜めの関係」をつくる人」の次の層の養成、どう出していくのが課題。
- ・その中には札幌だけではなく、田舎との関係性の視点を入れる。
- ・そのつながりがひいては都市のコミュニティ性を生み出す可能性があると考えている。

#### 【杉岡部会長】

- ・田舎に行って、若者たちがいろいろな体験でステップアップしている。
- ・札幌市内だけではなく、札幌を中心都市とすると、北海道の他地域との中で、育てられる。

#### 【高木委員】

- ・育てやすい環境が都市商店街でも育成されている。

- ・しかし、小さな町の方が、若者が自分で企画し、調べ、調整し、実現させるのによいスケール。
- ・「札幌の中でイベントをひとつやってください」となれば、誰もができることではない。
- ・小さな規模で、その社会とある程度の舞台、登場人物を紹介するだけで、若者は企画し、脚本を見事に書いて実現する。
- ・札幌と周辺の町村との関係性をつくりたい。
- ・市内でも登場人物を用意すればもちろんできると思う。

#### 【杉岡部会長】

- ・オドオリ大学ではないが、社会的参加への動機付けにどんな着火材が必要か。
- ・アイデアを現実化し、発火後どうエンジンをかけるか。
- ・民間と行政の連携のあり方についてどう考えればよいか。

#### 【服部委員】

- ・オドオリ大学について紹介する。
- ・授業料は無料。資金繰りは事業に協賛してもらうスタイル。
- ・学長はオドオリ大学を実現するために会社をやめた。
- ・彼女を支えよう、というのが私たちの思いだった。
- ・オドオリ大学への参加者にとって、この 20 代女性学長の発信するメッセージや授業のテーマ性が共感を生んでいる。
- ・共感を生む、参加すると知り合いができる。次のものにつながっていく。どんどん開いていっている感覚がある。
- ・そうした流れを邪魔したくないので私はあまり授業に出ないようにしている。
- ・若い人たちがやっているからこそ、さすがしさがあ、共感が生まれ、取り組みが進む。
- ・周りの企業もそれを応援してくれていると思う。

#### 【杉岡部会長】

- ・福士委員は、まちセンの仕事を長くされている。
- ・商店街、学校、まち、行政、のつなぎ目にいる。
- ・その経験から行政の関わり方、地域の視点からどうあるべきか。
- ・石山地区のように進むにはどうあるべきか。

#### 【福士委員】

- ・地域と行政の連携・関係については以前からよく言われている。
- ・2つの関係がどう交わるのがよいのか？
- ・行政は能力が高いが、「行政が地域に与える」ではだめ。
- ・地域の発想で仕掛け、行政が協力する仕掛けでないと進まない。
- ・まちセンの自主運営地区が増えるとよい。
- ・案件解決がストレートでスピーディーに進む。
- ・今後の取り組み方は「お願い」ではなく「自分が提案する」という関係性を整理してもらう。

### 【杉岡部会長】

- ・五十嵐委員から話があった「冬月荘」は、強力なリーダーが周りを巻き込んでいると思う。
- ・札幌市の中では共生型事業をどう組み込めるのか。
- ・コミュニティの中にどう組み込むのか。
- ・地域で訪問介護や小規模多機能など多数あるが、札幌の中での共生型事業のあり方、進め方についてお願いする。

### 【五十嵐委員】

- ・仕組みづくりには時間がかかるので早く進めたい。
- ・冬月荘についても、リーダーが最初から「強力」だったわけでない。素質はあっただろうが。
- ・様々な取り組みの中で、少しずつリーダー的な存在になり、コーディネーターになっていった。
- ・札幌という大都市の中でできるか？札幌の考え方が必要。
- ・釧路の丸写しではできない。
- ・札幌でも同様の取り組みをはじめている人は、小粒ながら出てきている。
- ・しかし、現状は小粒だけに、横につながりが広がらない。目の前にニーズはあるのだが、気がつかない。
- ・プラットフォーム的な仕掛けが重要。区単位ではなく、もっと細かく。
- ・地域の概念はいろいろだが、地域の中で困っている人が「相談にのってほしい」と言えるところ。
- ・行政は「場づくり」が上手なのだが、そうではなく、行政が自ら企画機能の中に入り込むことが必要。
- ・行政の「場づくり」だけではだめ。民間が場づくりを進め、行政が入る。それこそ行政の役割がたくさん必要とされる。
- ・「地域」の単位は「作業所・町内会・地域包括支援センター…」でもいい、「気づいた人たちが単位」。
- ・福祉のサービス事業所は地域にあり、専門家がいるのに地域とは切り離されている。
- ・専門家は枠の中にとらわれている、もっと広げていいのでは。

### 【高木委員】

- ・共生型事業について。
- ・私たちは小さな町での活動が多いが、都市も同じでは。コアが必要。
- ・地域ごとに解決する方程式が違う。
- ・都市のほうがコアになる「地域支援」の材料がたくさんある。図書館、商店街、まちセン……一つのタイプでなくてもいい。
- ・石山でモデルができれば、他でもできるとは限らない。
- ・地域はそれぞれ人・地域特性が違う。そうすれば方程式も違う。
- ・地域資源の多さを活かした共生型事業ができればいい。

### 【杉岡部会長】

- ・多様な資源、どのように人材が育成されるか。
- ・多様さ。共通にどう考えればよいのか。
- ・サポートがなく、具体的な問題が出てこない。
- ・例えば除雪にしても、福祉除雪の対象や近所での助け合い、パートナーシップなど。



- ・日常の悩みが言いづらい、具体的な問題が出てこない。
- ・近所づきあいが薄くなっていく。悲観的な気持ちも実際だが。
- ・防災のようなことがきっかけになって、うまく仕組みが動かないか。
- ・災害弱者の話で、障がい者の方など困っている方を登録するにしても呼びかけをどうするか。

#### 【浅香委員】

- ・札幌市要援護者対策について、以前に市へ「提言書」を出した。
- ・その際は、困っている人は障がい者・高齢者・妊産婦などすべてを手上げ方式とした。
- ・広報誌を通じてやるという話だったが、全市的には立ち上がっていない。
- ・町内会単位でみると、全市のうち取組みが進んでいるのは約5%。
- ・札幌市全域で町内会、班長、地域が成り立っていると思う。
- ・役所、地区社協、まちセン、民生委員と役割はあるが、そのつながり・地域間の温度差が大きい。
- ・対人間関係もあるが、施策的にはすばやく立ち上げてやってほしい。
- ・この取組みを知らない町内会もある。
- ・自主的に取り組んでいる地区をPRし、温度の低い地域に行政からアクションを起こし、地域民間団体等が連携し、まちづくりのために協力する形で取り組んでほしい。
- ・残りの95%は、なかなかアクションできないので、行政に着火材になってほしい。
- ・企画を進めるのは「地域の人」がベスト。

#### 【杉岡部会長】

- ・具体的な提案・意見・アイデア出てきている。
- ・ビジョン検討にあたって、地域コミュニティのあり方、行政の役割はどうあるべきか？
- ・「住民が自由にやれば」では動かない。
- ・札幌市のまちづくりの方針も見えてこない。
- ・微妙な問題もあるが、委員の皆さんから行政の考えるべきことを指摘いただいた方が意味合いがわかりやすいと思う。

#### 【中島専門委員】

- ・「まちセンのあり方」という問題があると思う。
- ・まちセンは、札幌市の大きな財産。
- ・私のふるさととは大阪で、大阪にも関わってきた。
- ・まちセンがたくさんあるのは意義あること。
- ・ではどういう機能を果たすのか。課題は何かもう見えてきている。
- ・市役所の人材と地域のミスマッチ。
- ・地域の人たちの動機付けを引き出す。
- ・マネジメントし、プラットフォーム、新たな機能をつくる場。
- ・そこに住む人の「おせっかい」をエンカレッジする。
- ・まちセンの人材はどういう人がいいのか、住民に聞くべき。
- ・町内会は高齢者が多い。ふつう人間として「おじさんは若い女の子、おばさんは若い男の子が好き」なので、まち

センには「課長職のおじさん」がいるより「入庁 5 年目くらいの若い人」、まちの人が育てたくなる人がよい。若い人がまちセンにいと行きたくなる。

- ・人には「教えたい」という欲求があるので、若い人材をまちセンに置いてはどうか。
- ・公務員改革として、人数削減・給与削減がメインなのはナンセンス。
- ・本来の問題である「質的改善」を改革すべき。
- ・田舎の小さな町では人材は限定され、公務員が担う役割は大きい。
- ・公務員はトリックスターとなるべき。トリックスターとは「よそ者の機能」。公務員がそれを担うべき時代。
- ・そのような人材の質的改善が必要。それが一番機能するまちセンだと思う。
- ・五十嵐委員のご意見にあったプラットホームは広域だと難しい。まちセンをベースとすべきだと考える。
- ・全体像を把握できる領域で、段階別にプラットホームを置く。まちセンから区、それから市、そして道へ。

#### 【星野委員】

- ・教育について。
- ・資料1をみて思ったことは、子育てについては育つ本人より育てる親の問題が語られることが多い。
- ・「ねらい」に記載してある「仕事と生活の調和」が重要。
- ・仕事中心の場合、子育てに関われない。
- ・地域活動に参加しないのも同様。
- ・これは企業の体質が変わらないと、個人の生活スタイルも変わることができない。
- ・企業にいと子育てにも地域にも関われない。
- ・行政からどう企業にアプローチすべきかはわからない。難しいが改善できればいいと思う。
- ・(株)ワークライフバランスの小室代表が国会内での発言で「失業問題等について短期的な解決を目指すことが、長期的な解決の支障になっている」と言っていた。
- ・その視点をより広められたらと思っている。

#### 【杉岡部会長】

- ・行政の出番・役割については、どのようなことが必要だと思うか。

#### 【服部委員】

- ・「余計な事はしない」こと。
- ・主体性のないものに支援はできないので、主体のあるものを大事にしてほしい。

#### 【杉岡部会長】

- ・まちセンについてその他ご意見を。

#### 【五十嵐委員】

- ・次世代について、中島先生から話があった若者の「新しい地元主義」。ご指摘どおりだと思う。
- ・高木委員の話と重複するが、高齢者は医療機関等を求めて、居住地区から出てしまう。札幌は全道の過疎問題に無関心ではいられない、といった話を若者にすると、そこに行ってまちづくりしよう！と言う。
- ・若者のやりたい思いを支援するのが大人の役割。

- ・手上げのプロポーザビリティで、「おせっかい部隊プロポーザル」などがあっても良い。
- ・行政は財政的に厳しいと思うが、お金には「意志をもたせる」ことが重要。
- ・事業を強制・誘導するのではなく、プロセスガイドラインに沿いつつ、自発的に進めてもらう方式。
- ・あまりしぼりをつけず、お金をどう使うかは自由だが、プロセスのガイドラインには則っていく。

#### 【高木委員】

- ・行政の役割について。
- ・札幌市の中で1割くらいの人が動き出しているかもという話があった。
- ・相当数の方の動きが増えている。すごいことだ。
- ・いま自分が住んでいる3,200人の町なら実際取り組んでいるのは30人、1%だと感じる。
- ・最近やらなくなったこととして、日本語にはいい言葉がある「お車代」「お心付け」。最近なくなってきている。
- ・そのくらいで動く人はたくさんいる。
- ・高齢者施設や精神病院などでイベント企画をしても継続できない。
- ・食事代、ガソリン代が負担になる。それが大きい。施設も病院も負担できないのが現状である。
- ・すべてボランティアになってしまう。
- ・無料でアコーディオンを弾きますという人がいて、約300件の施設等に案内を送った。
- ・すると、3分の1以上の施設から来てほしいと依頼があった。
- ・これは企業などからの支援があるから行けるが、ボランティアではできない。
- ・行政からの支援はこうした「ビタミン剤」程度が必要だと思う。

#### 【木下専門委員】

- ・いま各地域にどのようなものが必要か。
- ・どんな相談でも引き受け、どこに相談すべきか振り分けるコーディネート機能を持つ地域の総合相談窓口と、直接的な支援。
- ・地域には中学校区レベルの住民組織等がつくられ、様々な地域で動きが出ている。
- ・貧困に関する取り組みの湯浅氏などが実際に行っている「パーソナルサポート」などの伴走型支援も必要。
- ・行くべき場所がわかっても行けない人がいる。付き添って支援してくれる人が必要。
- ・梶井委員から話のあったユースコミュニティソーシャルワーカー。分野で専門性をもつ、案内をできる。
- ・大阪府にはコミュニティソーシャルワーカーが既におり、成果をあげている。
- ・エリアは中学校区。例えば郊外の阪南市なら5人。彼らはどんな相談も受け付け、解決するまで付き合う。
- ・教育の問題、住宅の問題、何が出てきても、人との関係性ができているので、何でも相談できる。
- ・関わり方を総合的にできる。個人の問題を地域住民、そしてさらなる専門家につなげる人材である。
- ・コーディネート機能も必要。
- ・関わる各団体の代表者が集まる、問題対象ごとにチームをつくる。
- ・大阪ではコミュニティソーシャルワーカー会議もあり、府単位の会議もあり、そこでも解決策を探ることができる。
- ・まちセンのコーディネート機能。基本的役割は、「お金を提供する」、「基軸的な支援・相談を受ける」、「ネットワークづくり」、「地域のルールづくり」。行政が話す意味は大きく、民間だけだと個人的感情が入る。行政の声が入れば参加しやすい。
- ・行政に何ができるか。大きく3つしかない。

・「福祉国家」の議論の中では「ルールをつくり規制する」「直接サービスを提供する」「資金提供する」の3つしかない。この3つを各地域で使い分けてどうまちづくりするかを考えるべき。

#### 【杉岡部会長】

- ・地域に愛着をもって住めることを考える。
- ・まちセンは中核的存在になる。
- ・多様な人が住みやすい地域にするために、様々な地域・人が取り組んでいる。
- ・つながり方をどうすればいいのか。
- ・既存の地縁団体とテーマ型団体。
- ・まちセンのような「調整役」の役割が出てくる。
- ・具体的な拠点づくりとして、札幌市の都市計画の中でどのくらいのユニットか。
- ・コミュニティ、活動、組織、まとまりやすく多様性を維持できるのか。
- ・今後の整理、たたき台をつくる中で、きっかけをどこにもうけて動き始めるか。
- ・「人がまちをつくり、まちが人を育てる」。
- ・札幌市だけでなく、地域との連携も考えながらの人づくり。
- ・より快適なコミュニティを追求し、考えたい。
- ・次回はより具体的な話し合いができるように準備したい。
- ・事務局にさきほど整理してもらったが、新しいバージョンを用意し、4月に話し合いを設けたい。
- ・多忙と思うがぜひ調整のうえ、ご参加いただきたい。

以上